

令和7年度 活動実践報告書



令和7年度 第13回 総合学科発表会

期日： 令和8年1月29日(木)

場所： 本校 産社室

佐賀県立唐津青翔高等学校

表紙写真：創立20周年を記念し、ドローン撮影

目次

「巻頭言」 ～唐津青翔高等学校 校長 山口 敦～

(1) 発表Ⅰ

- ① 1年次「産業社会と人間で学んだこと」 1
- ② 2年次「総合的な探究の時間での学び」 3

(2) 発表Ⅱ

- ③ 「日韓交流史」学習報告 6
- ④ 「全国高校生自然環境サミット」に参加して 9
- ⑤ 「福祉コンテスト」に参加して 11
- ⑥ 3年次「課題研究」より 12

(3) 発表Ⅲ

- ⑦ 韓国文化系列 15
- ⑧ 環境系列 17
- ⑨ 情報ビジネス系列 20
- ⑩ 生活福祉系列 23
- ⑪ 美術・デザイン系列 24

巻 頭 言

佐賀県立唐津青翔高等学校長 山口 敦

唐津青翔高校に総合学科が誕生し、令和8年3月で丸15年となります。今年も本校では、これまでの伝統を引き継ぎ、総合学科の5つの系列の特色を最大限にいかした取組を行ってきました。

韓国文化系列は、釜山外国語大学校への交流訪問や韓国ナジュ高校とのオンライン交流を通じて異文化への理解を深めました。また、名護屋城博物館で日韓交流史を学び、歴史と現在を結ぶ視点を養いました。環境系列は、玄海町や唐津市内の環境に関する取組をおこなわれている企業等を訪れ、体験学習を通して環境問題への理解を深めました。特に、今年は創立20周年ということで、その記念行事として全国高校生自然環境サミット佐賀大会を主催し、全国の仲間と自然環境の保全について真剣に語り合いました。情報ビジネス系列は、地場産業と協力した商品開発や地域のイベントでの販売実習等の体験をするなど、地域とつながる学びを実践しました。生活福祉系列は、介護実習や地域イベントへの参加のほか、地元の社会福祉協議会と連携し、サロン活動を通じて高齢者との交流を深め、思いやりの心を育みました。美術・デザイン系列は、素描や絵画、彫刻、デザインなどの作品制作活動を地域行事へ出品する等して地域貢献を行いました。

これらの地域や社会とつながる多彩な活動を通して、生徒一人ひとりが自らの興味や関心に応じて学びを深めることができたのではないのでしょうか。

総合学科発表会は、これまでの努力の成果を全校で共有し、互いに学び合う大切な機会となりました。この発表や意見交換を行ったという経験は、必ずや自らの成長につながります。そして、未来に向けてさらに大きな一歩を踏み出すことへの足掛かりとなるものと信じています。

最後に忘れてはならないことは、このような素晴らしい活動の裏には、玄海コンソーシアムをはじめとした地域の皆様の多大なお力添えや協力があったということです。紙面をお借りして、感謝の意を述べたいと思います。

発表 I

- 1 年次 「産業社会と人間」 で学んだこと
- 2 年次 「総合的な探究の時間」 での学び

1 研究テーマ 1 年次「産業社会と人間」

「産業社会と人間」(略称:「産社」)は総合学科の原則履修科目として位置づけられており、総合学科に学ぶすべての生徒が1年次に履修する。その学習のなかで、

- ・自己の生き方の探求を通して、自らの職業を選択・決定する能力や態度の育成
- ・将来の職業生活を営む上で必要な態度やコミュニケーション能力の育成
- ・産業社会における自己の在り方の認識と豊かな社会づくりに寄与する態度の育成

が図られる。具体的には、社会人や地域の人々を講師に招いての講話をはじめとした地域社会との積極的な連携や見学、調査・研究、発表などの体験的・課題探究的な学習活動を取り入れ、生徒が主体となって活動する学習を半年間で行っている。また、自己の将来の生き方や進路を考察するとともに、次年度の自らの各教科・科目の履修計画の作成を行うなど、キャリアガイダンスの役割も担っている。また、今年度は九州大学より臨床心理士の先生をお招きして、友人同士で支え合える関係の構築を目指す「ピア・サポートプログラム」を導入した。

年間計画は以下のとおりである。

「産業社会と人間」 年間計画	
オリエンテーション	青翔高校、総合学科とは／自分の目標と目的を設定
自己理解	「産業社会と人間」って、何の授業？／共に学ぶ仲間との出会い
	コミュニケーション・スキル
	自分って何だろう？
	自分史を作ろう (ワークシート完成～400字にまとめ)
	身近な人の職業についてインタビュー
	第1・2回 ピア・サポートプログラム 多様性について／聞く時の姿勢や態度
	第3・4回 ピア・サポートプログラム 閉ざされた質問・開かれた質問／対立解消スキル
	第5・6回 ピア・サポートプログラム 自己理解ワークショップ／ストレスマネジメントワークショップ
職業理解	働くことって、なんだ？／職業についてしらべてみよう／資格の必要な職業もある／労働環境はどう変化した？
系列学習・系列体験	生活福祉系列 情報ビジネス系列 美術・デザイン系列 韓国文化系列 環境系列
ライフプラン	私のライフ・プラン
社会理解	上級学校訪問
	先輩と語る会
履修計画	自分だけの時間割をつくろう
未来へ向けて	5年度、10年後の自分へ手紙を書く 産社ノートの整理
産社を振り返って	アンケート実施

生徒は半年間学んだ「産業社会と人間」の授業を通して、印象に残った内容をまとめ発表を行った。総合学科発表会では、学年より代表生徒2名が発表を行った。

1 研究テーマ 「産業社会と人間」で学んだこと

2 系列名・学年・氏名 1119・1212

3 指導担当者 古賀 裕貴

4 研究目的

「産業社会と人間」の授業を通して、自己の在り方を見つめ直し、コミュニケーション能力の重要性を学び、将来について深く考えることができた。また、総合学科発表会に向けて、「産業社会と人間」で学んだことを振り返り、改めて学習内容を意識することができた。今回はそれを書き記すことによって、自分たちの学びの軌跡とし、同級生や先輩たちに「産業社会と人間」の授業について思い出してもらったり、後に続く後輩たちの道しるべにしたりすることを目的とする。

5 実施内容

【1119】

「産業社会と人間」の授業を通して、①「自分」ってなんだろう？、②「コミュニケーション・スキル」ってなに？、③「資格の必要な職業」もある、という3つの内容が印象に残った。

1つ目の「自分」ってなんだろう？の授業では、私たち高校生は青年期を迎える時期であり、その時期では「自分はなにものなのか」について真剣に悩み苦しむことが当たり前であることを学んだ。2つ目の「コミュニケーション・スキル」ってなに？の授業では、自分と相手が心地良い関係を築くために相手を気遣う力、つまりコミュニケーション・スキルを身に付ける必要があることを理解できた。最後に「資格の必要な職業」もある、の授業では、自分が高校生のうち取るべき資格やこれから頑張るべきことを整理することができた。

【1212】

「産業社会と人間」では、①「自分」ってなんだろう？、②「コミュニケーション・スキル」ってなに？、③「働くこと」って、なんだ？、の3つの授業が記憶に残っている。

1つ目の「自分」ってなんだろう？の授業では、私たち高校生が今過ごしている青年期が「第二の誕生」と呼ばれ、悩みや苦しみを乗り越えて大人になる時期とされていることを知った。2つ目の「コミュニケーション・スキル」ってなに？の授業では、これまでに比べてSNSなどを利用した文字でのコミュニケーションの機会が増加しており、そうした状況でも他者と良好な関係を結ぶことができるコミュニケーション・スキルを育てなければいけないということを学んだ。そして3つ目の「働くことって、なんだ？」の授業では、人が働く意味について整理して、自分が将来なぜ働かなければならないのかを考えることにより、自分の将来をイメージすることができた。

6 まとめ（結果）

【1119】

私は将来、ドレスコーディネーターになりたいと考えている。目標自体は以前から考えていたが、その職業に就くために具体的にどのようなことに取り組みれば良いのかということについては、考えられていなかった。高校に入学し、「産業社会と人間」の授業を受ける中で、高校時代に取れる資格を取りつつ、コミュニケーション能力を高めるためにたくさんの人と関わりを持ちながら積極的に活動することが大切であると分かった。卒業後は専門学校に進学し、ブライダルについて深く学びながら、自分の思い描く将来を実現できるように頑張っていきたい。

【1212】

「産業社会と人間」の授業を通して、今まで考えてこなかったようなことを自分でよく考えたり、友達の意見を聞いたりして、将来に関する学びを深めることができた。就職しようという漠然とした考えはあるものの、何の職業に就きたいのか、ということはまだあまり考えられていない。そこで、高校生の間には、将来必ず必要となるコミュニケーション能力を高めようと思うことができた。

7 考察と課題

【1119】

ドレスコーディネーターになるためには、人の意見や考えを正確に汲み取るコミュニケーション能力がとても大切なので、高校生のうちから意識して生活をしていきたい。

【1212】

コミュニケーション能力を高めつつ、2年次の総合的な探究の時間やインターンシップ体験を通して、将来就きたい職業を具体的に決めていきたいと思っている。

1 探究テーマ

仕事効率をよくするためには

2 系列名・学年・氏名

2104

3 指導担当者

佐々木 秀一

4 探究目的

私は比較的工作が遅く、インターンシップ以外にも生徒会等で同じようなことに悩まされていた。(資料1) もう少し、自分の判断が早ければ、円滑に仕事を進めることができるのではないかと思い、仕事効率についての探究を実施した。

5 実施内容

効率をよくする方法は、3点あった。1点目はタイムボックス法。2点目はTODOリスト。3点目はツールの活用だ。それぞれの説明を、わからない人に伝えるために冬期休業の課題に例えて行った。

タイムボックス法は、一つのタスクをバラバラに区切り制限時間を設けることで、一つ一つの分けられたタスクに集中して取り組むことができる方法である。(資料2) タイムボックス法を使うことで、計画を先に立てることになり、必ず時間厳守で終わらせることができるようになった。それにより、クオリティを落とすことなく完成させることができると分かった。

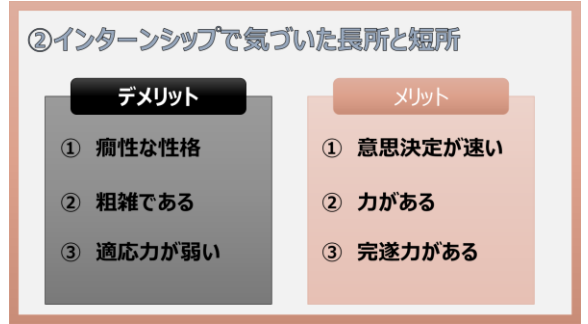
TODOリストは、優先順位の高いものから順番に、タスクを終わらせていく方法である。(資料3) 見える化することによって何から終わらせればよいのかが分かった。

ツールの活用については、全体のまとめとして行った。ツールに関しては、デジタルもアナログもあったが、特にデジタルツールについての探究を行った。活用ツールは、スマートフォンを主な機器として使い、メモ機能、エクセル、リマインダーを使ってタイムボックスシートやTODOリストを簡単に作ることも分かった。(資料4)

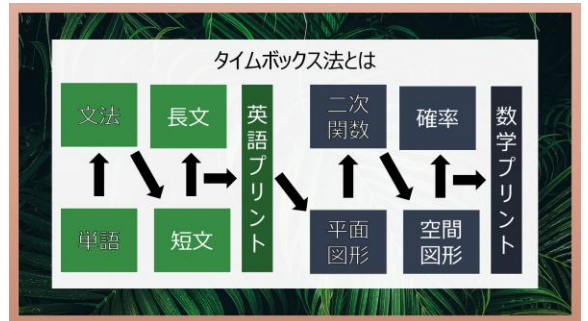
6 まとめ(結果)

少し計画の時間を確保すれば、簡単に誰でも効率よく仕事をこなすことができると分かった。生徒会や、部活動等の学内活動の他にも、プレゼン大会などの学外活動も多くあるので、やるべきことから、順序だてて効率的に仕事をこなしていこうと思った。

また、高校を卒業すれば厳しい社会が待っている。社会の歯車を回していく社会人の一員となれば、仕事効率の悪いものは埋もれていくだろうし、捨てられると思う。社会に出ても基本中の基本として必要なことを探究できて本当によかったと思う。



資料 1



資料 2



資料 3



資料 4

1 研究テーマ

視野の狭さを改善するには

2 系列名・学年・氏名

2201

3 指導担当者

大森 佳奈

4 研究目的

保育園でのインターンシップを経験し、目の前のことに精一杯で園児たち全員に目を向けられていないと感じることが多かった。また、先生の指示を聞き逃す、時間を把握できていないと感じたため、視野を広く持ち臨機応変に対応するためにはどのようなことをすればいいのか考え、将来に活かしたいと考えた。

5 実施内容

視野を広くもつためにどのような考え方や経験が必要なのかについて、主にインターネットを使い調べた。また、先生方にアドバイスをもらうということも行った。

まず視野が狭くなる原因について調べたところ、「不安や恐れ」「ストレスやプレッシャー」「経験や知識の不足」などがあるとわかった。視野を広く持つにはこれらの原因を取り除くことが必要だと思われる。

それらを取り除き視野を広げるためには、まず「正解は一つではないという意識」が必要である。何か問題が発生したとき、正しい対応が一つだと無意識に考えてしまうが、その無意識に気づき改めることが大切だとわかった。実行可能な対応をいくつか考え、その中から最善のものを探し出すという方法を意識したい。次に、「認知的成熟性」を高めるということも重要となる。

「認知的成熟性」とは、「物事を客観的な視点で見ること」「多様な考えを寛容に受け入れること」などと言い換えることができる。それらは簡単ではないが、新しい価値観や異なる文化に積極的に触れる、失敗を学びの機会ととらえるとといった経験を積み重ねることで少しずつできるようになる。

先生方には、ものごとを自分の見方だけで見るのではなく、他者の見方を積極的に取り入れることで視野を広げられるとアドバイスをいただいた。



6 まとめ（結果）

インターンシップに実際に行き、子供たちと関わるなかで、コミュニケーションをする上での意思疎通がとても難しく、相手が何を言いたいのかくみ取ることが大切だと気づかされた。今回の課題研究を通して、自分だけの視野で対応するのではなく、人それぞれに持つ価値観や文化を尊重し、さまざまな視点からのアプローチを試みるということが大切であるとわかった。

7 考察と課題

私は、これからもっと幅広い年代の人との関わりを積極的に持ちたいと感じた。また、視野を広げることもコミュニケーションをとる上で大切な部分だとわかったので、今後の学校生活で今回挙げた課題を改善するための策を実行していきたい。

発表Ⅱ

- 「日韓交流史」学習報告
- 「環境サミット」を主催して
- 福祉体験を通して学んだこと
- 3年次「総合的な探究の時間」での学び

令和7年度「日韓交流史」学習報告

1. 生徒氏名 2108 2114 2125 2201 2203 2204
2207 2210 2217 2218 2220 (2年生・計11名)

2. 指導者 (唐津青翔高校) 西山奈美 松井広直 相川淳子
(名護屋城博物館) 久野哲矢 徳永慧 尹希支 末光博史 林田卓也

3. 報告書作成 2217

～学んだこと～

4. 授業 年間計画

1	4月17日	開講式・オリエンテーション
2	4月24日	日韓交流史①
3	5月1日	日韓交流史②
4	5月8日	名護屋城跡フィールドワーク
5	5月15日	文禄・慶長の役と名護屋城①
6	5月22日	文禄・慶長の役と名護屋城②
7	6月5日	フィールドワーク事前学習
8	6月12日	中尾家屋敷フィールドワーク
9	6月19日	日韓交流史③
10	6月26日	日韓交流史④
11	7月10日	韓国文化学習
12	9月4日	調べ学習①
13	9月11日	調べ学習②
14	9月18日	調べ学習③
15	10月23日	調べ学習④
16	10月30日	発掘調査体験事前学習
17	11月6日	発掘調査体験
18	11月20日	日韓交流史⑤
19	12月4日	総合学科発表会準備①
20	12月11日	総合学科発表会準備②
21	1月15日	総合学科発表会準備③
22	1月29日	第13回 総合学科発表会
23	3月19日	1年間のまとめ・閉講式

①交流のはじまり・・・唐津や東松浦の歴史、古い地名の由来を学んだ。この地域は、昔から朝鮮半島との交流があった。鏡・唐房・神田・呼子・領振山・神集島など特にゆかりのある地域も多いことを知った。また、7000年前の動物の骨や矢じり・土器などが唐津でも見つかっており、その実物を博物館で見学した。

②鯨組主中尾家屋敷フィールドワーク・・・昔は呼子を中心に捕鯨を行っており、人々の暮らしを豊かにする為に、鯨を色々な物に加工し、無駄なく利用していたことを学んだ。

③韓国の工芸品・・・実際に実物を見ながら、当時の韓国の人々がどのような工芸品を作り、使用していたかを学んだ。また、そのような工芸品のデザインに、どのような思いや願いが込められていたのかも知ることができた。

④国際交流員と学ぶ日韓交流・・・韓国の伝統文化や年中行事、最近の韓国文化と日韓交流について様々なことを学んだ。また、日常生活で使える韓国語会話も教えていただき、韓国の方の考え方なども知ることができた。

⑤発掘調査体験・・・前田利家陣跡で、発掘調査体験を行った。実際に、陶器の破片が出てきたが、それは昭和時代ぐらいのものだった。また、地層や石の位置などから、いつの時代の物なのかを推定できることも学んだ。



1 調べ学習のテーマ

日本と韓国の礼儀や価値観の違いについて

2 系列名・学年・氏名

韓国文化系列 2201

3 指導担当者

西山奈美・松井広直

4 調べ学習の目的

韓国語の勉強をしており、韓国へ旅行に行きたいと思っている。韓国の礼儀作法や価値観の特徴について調べ、日本との違いを明らかにすることで、旅行などで韓国の人と交流する際に役立てることを目的とした。



5 実施内容

- ・韓国では儒教の影響で年功序列・上下関係を重んじることがわかった。
- ・韓国では日本と違って、常に「敬語」を使うことがわかった。
- ・日本は集団主義、韓国は個人主義という価値観の違いがあり、韓国では意見や感情をストレートに表現することが多い。
- ・日本は「察する文化」、韓国は「表現重視型」の文化。日本は空気を読む傾向がある。

6 まとめ（結果）

- ・日本と韓国では、年齢の違いを重視する。
- ・日本と韓国では、食事のマナーが違う。
- ・日本と韓国では、さまざまな面において「価値観の違い」が存在する。

7 考察と課題

- ・日本と韓国で比較をしてみたが、すべての人がその特徴を持っているわけではない。日本人も韓国人も人によってさまざまなので、「全員がそうではない」ことを意識し、決めつけすぎないことも大事だと感じた。
- ・今後の韓国語学習では、日本と韓国での礼儀や価値観の違いを意識して学ぶようにしたい。
- ・韓国旅行の際には、日本とは違う食事のマナーがあることがわかったので、今後もっと具体的に食事のマナーについて学習しておきたい。
- ・日本でも年齢は気にするが、韓国では敬語の使い方が違う。韓国の方と接するときは韓国語でも日本語でも「敬語」の使い方を気を付けるようにしたい。また、儒教文化が影響していることがわかったが、自分と同年代の高校生などでも、年齢やそれにもなう言葉遣いを気にしているのかも調べてみたいと思った。

⑤日本と韓国の価値観の違い

日本

「察する文化」で言葉にせずとも空気を読む傾向があり、集団行動を重んじる文化や、自己主張を控えるのが特徴

韓国

「表現重視型」で自分の意思をはっきり伝えたり、明白で開放的で助け合いの精神が強いのが特徴

1 調べ学習のテーマ

韓国で人気の日本のキャラクターについて

2 系列名・学年・氏名

韓国文化系列 2210

3 指導担当者

西山奈美・松井広直

4 調べ学習の目的

日本のキャラクターが韓国でも人気があることを知り、なぜ、韓国で人気があるのかについて調べ、その理由を明らかにすることを目的とした。

5 実施内容

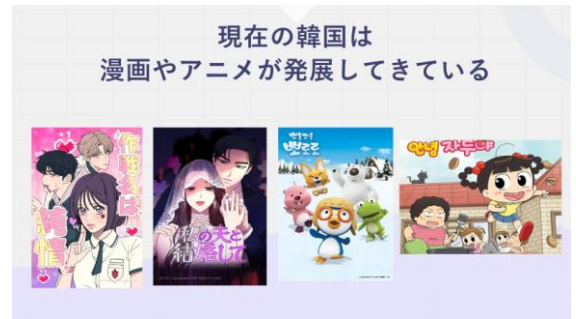
- ・日本のキャラクターを好きになったきっかけを調べ、さまざまな理由があることがわかった。
- ・日本に多くのキャラクターが存在するが、その理由の一つに「八百万の神」が存在するという古代日本人の考え方が関係していることが分かった。
- ・韓国で人気の日本のキャラクターについて調べ、「クレヨンしんちゃん」が1位であることが分かった。また、韓国で放送中の日本のアニメの中で一番長い歴史があることも分かった。
- ・日本で人気なキャラクター1位はドラえもんであるが、ゲームのキャラクターが人気なことが分かった。
- ・現在の韓国では電子書籍作家が増加し、LINEマンガでは日本語に訳され日本でも人気がある。
- ・韓国と日本のアニメ・マンガの特徴を調べ、その違いが分かった。

6 まとめ（結果）

- ・現在、韓国と日本はキャラクターを文化的に共有している。
- ・それぞれの国で、独自のキャラクターも発展している。

7 考察と課題

- ・韓国で「クレヨンしんちゃん」が人気なのは分かったが、日本と違って子どもだけでなく幅広い年代で人気がある理由をもっと調べてみたい。
- ・韓国と日本で、キャラクタービジネスの展開方法や海外への発信戦略に違いがあるか調べてみたい。



1 研究テーマ 『第26回全国高校生自然環境サミット佐賀大会運営報告』

2 系列名・学年・氏名

2104 2110 2114 2202
2225
1108 1118 1215

3 指導担当者 坂田 有規 飯田 智子

4 研究目的

本大会は本校20周年記念行事として開催した全国高校生自然環境サミット佐賀大会の企画・運営を通してリーダーシップと主体性を育むとともに、自然との共生について考えることで改めて佐賀の自然の良さについて認識することを目的としている。

5 実施内容

①全国高校生自然環境サミットとは？

本大会は環境学習に取り組んでいる全国の高校生たちが、開催地の豊かな自然の中で様々な体験活動をし、自然と人間との関わりについて考えるイベントである。このイベントは旧唐津北高校（現唐津青翔高校）がスタートさせた大会で、佐賀大会は実に20年ぶりであった。また、このイベントの大きな特徴は開催校の高校生だけで企画と運営を行い、引率や開催校の教員は基本介入せず参加者としてついていくことである。今回2学年全体で佐賀大会の企画・運営を行い、1学年から3名が参加した。開催するにあたり、改めて他県の人達に紹介できる佐賀県の自然とは何か考えた。

②佐賀県の自然の特徴

佐賀県は北部には玄海灘、南部には有明海という異なる性質の2つの海にはさまれている。玄海灘は漁場、有明海は干潟が有名であり見た目から全く異なる。また、自然豊かな印象が強い佐賀県だが人の手が入っていない自然は少なく、人の生活と自然の距離が近いことも特徴の1つである。

このような佐賀県の自然の特徴と、開催校である唐津青翔高校といえば「校舎から見える海！」ということでテーマを「里海」にし、大会をつくっていくことを決定した。期日は8月6日から8月8日の2泊3日で行い、今回は本校を含め近年で最多の10校（群馬・東京・福岡・鹿児島・沖縄）が参加した。

③大会当日までの流れ

6つの班に分かれて大会準備を進めた。班ごとの業務は以下の通りである。

- 進行班・連絡班 → 当日の運営
- フィールド班 → 活動する現場での説明・案内
- しおり班 → 当日参加者に配布するしおりの作成
- Tシャツデザイン班 → 本大会オリジナルTシャツの作成
- 昼食班 → 大会期間中の昼食の内容の提案・業者との打ち合わせ

2年生全員がそれぞれの得意分野を生かし、上記の班に分かれて大会に向け準備を進めた。結果と考察は運営に直接携わった進行班・連絡班について紹介する。

6 結果（大会当日）

原稿の作成に加えて、夏季休業中にも4度にわたって現地練習を重ねた。入念な準備をして迎えた本番では、運営全体が自分の役割に対し自ら考えて動く『自主的な行動』を実践することができた。大会中には様々な課題も生じたが、その都度話し合うことで改善を図り、大会を運営する中で大きく成長することができたと感じた。大会内容の紹介とともにその点を説明する。

①1日目

1日目は鹿島市で活動を行った。日程は以下の通りである。

- 開会行事・アイスブレイク（七浦スポーツ公園体育館）
- ↓
- 干潟体験（干潟の感触と生物の観察）
- ↓
- 夕食（ガタッコハウス）
- ↓
- 波戸岬少年自然の家で入浴・就寝

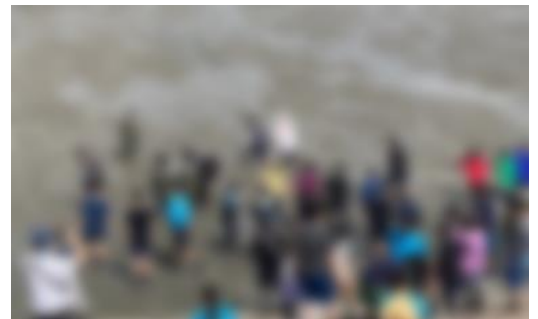


写真1：干潟体験の様子

② 2日目

2日目は肥前と呼子で活動を行う予定だったが、午前中は天候不良によりスケジュールを一部変更した。

シーカヤック体験・いろは島散策（シーカヤック体験は中止で学校紹介を班ごとに行った）

↓
昼食（パレア）

↓
磯の生物観察（呼子）

↓
ワークショップ（波戸岬少年自然の家）

「自然を守るとは？/人間活動をしながら環境をどう守るのか」



写真2：いろは島散策



写真3：呼子での磯の生物観察



写真4：ワークショップ

③ 3日目

3日目は最後のワークショップ「ヒトがどこまで自然に介入するのか」を行い、自然環境宣言（本大会で学んだことを活かして自然と共生するためにどう行動していくか）を学校ごとに発表した。その後、閉会行事を行い本大会が終了した。

④ 日程を通して

入念な準備をしてきたにも関わらず、初日はとても緊張し、運営内部での指示がうまく通らなかった。また、活動開始の時間を集合時間として伝えたためにスケジュールが全体的に押してしまう結果となった。点呼班は参加者全体を6つに分けた班の班長になり、進行班からの指示を班員に伝える役割を担っていたが、指示のメモをとらなかった結果、班員に伝える際や質問に受けた際にうまく伝えられなかった。そのため、2日目以降は集合時間を記載の時間より5分早く伝え、点呼班も連絡をきちんとメモに取り班員に伝えるようにした。スケジュールの変更もあったが、反省をもとに全員で密に声を掛け合うことで乗り切ることができた。次第にそれぞれが自分たちで考えてスケジュールを円滑に進めるための工夫をできるようになり、話し合いも伝達もうまく進むようになった。

7 考察と課題

3日間全力で運営を行ったため、閉会式後にはとてもつもない体の疲労を感じたが、なぜか深い喪失感とさみしさも味わった。この感情は1人だけではなく運営を行った人の共通の気持ちで、きつかったはずなのに寂しいという不思議な感情だった。運営は3日間とも参加者と一緒に活動をするわけではなく、誘導したり指示を出したりすることがメインで楽しみというより憂鬱な気持ちのほうが大きく、正直帰りたいと感じる時もあった。しかし前述したような感情は、全力できついことに立ち向かったからこそその達成感と喪失感なのではないかと思う。「やりがい」とはこういうもののことではないかと思った。参加者からも楽しかったと言ってもらえ、引率の先生からもたくさんお褒めの言葉をいただいた。何か月も前から準備をしたため、とても嬉しく無事に終わることができてよかったと思う。サミット終了後は、サガテレビや佐賀新聞等で本大会の紹介があり、改めて本大会の規模の大きさを実感した。これほどの規模の大会を運営したことは自信になり、とても思い出になるものだった。



写真5・6：サガテレビと佐賀新聞での本大会の紹介

1 研究テーマ

「福祉体験を通して学んだこと」

2 系列名・学年・氏名

生活福祉系列2年 2118

3 指導担当者

綾部 公基

4 研究目的

援助者に求められる姿勢とは何か。

5 実施内容

1) 福祉体験

①地域福祉の分野

- ・ハンドマッサージ ・保育ボランティア ・高齢者施設（マルシェ）
- ・児童向け高齢者疑似体験サポート

②障害者福祉分野

- ・手話教室 ・唐津市障害者体育大会運営ボランティア

③高齢者福祉の分野

- ・認知症サポーター養成講座受講 ・地域サロン（座川内地区）
- ・介護実習（玄海町社協デイサービスセンター玄海園、特別養護老人ホーム潮荘）

2) 佐賀県高校生介護技術コンテスト

①6月二人介護部門出場（2111 2221）

②11月ベッドメイキング部門出場（1116） 基礎技能部門出場（2221）

6 まとめ（結果）

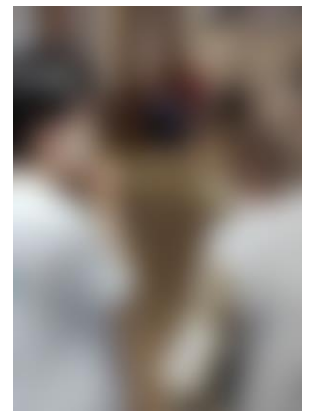
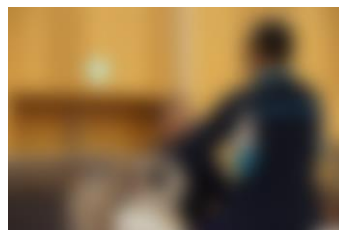
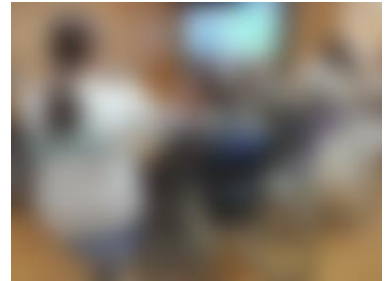
【佐賀県高校生介護技術コンテスト（結果）】

- ・6月 二人介護部門 第4位（出場校7校）
- ・11月 ベッドメイキング部門 第6位（同上）
基礎技能部門 第6位（同上）

7 考察と課題

生徒の福祉に関する興味・関心に基づき福祉的活動に取り組んできた。その中で、生徒自身は対人援助関係をどのように形成したらよいか、またその援助の方法やコミュニケーションのとり方はどのようにしたらいいのかなど、自ら考え、主体性をもって実践にあたった。これらの経験を通して、2年生ながら出場した6月の佐賀県介護技術コンテストでは、他出場校選手に引けを取らない介護技術やコミュニケーション技術の高さを示すことができた。

3年次に向けての課題としては、様々な場面で必要となる自己表現力の向上である。さらなる向上心と現状に甘んじない姿勢を継続し、地域社会の皆さんに喜んでいただけるよう介護技術とサポート方法の研鑽に励む必要がある。



1 研究テーマ 「高校生とカラコンおしゃれ目的？その実態を探る」

2 学年・氏名 3年 3112

3 指導担当者 西山 奈美・坂田 有規

4 研究目的

- ・カラーコンタクト（通称カラコン）を普段使いしているものの、価格が高いため、将来どのようなようになるか気になり、探究学習のテーマに設定した。
- ・生徒のうちどのくらいの割合が普段カラコンを付けているのか気になったから。

5 実施内容

世の中に対して、カラコンがどのような需要を持っているのかについて詳しく調べた。特に、カラコンが流行し始めた当時の背景や、その理由についても深く知ることができた。また、実際にどれくらいの人カラコンを使用しているのかを把握するためにアンケート調査を行い、カラコンをつけている人の割合を計算した。

さらに、学年ごとの違いを調べるために、3年生にはカラコンに対する考え方や今後の使用について詳しく質問したり、1年生や2年生、3年生それぞれに同様のアンケートを実施したりした。その結果をグラフ化し、数値やデータをもとにして分かりやすい発表を行った。

理由やアンケート結果をもとに分析を行い、カラコンの将来の流行や今後の行方について考察した。それに加えて、これからカラコンがどのように変化していくのか、自分なりの意見や考えをまとめ、最終的な結論として発表した。

6 まとめ（結果）

- ・カラコンは将来も多くの人に使われ続けると考えられ、技術の進化によってデザインや機能性がさらに向上し、より社会に通用するような自然で使いやすいカラコンが今後も広く利用されていくと思う。
- ・製造や開発にはコストがかかっているが、その分、安全性や品質管理がしっかりと行われており、目への負担を減らす工夫がされているため、安心して使用できる商品が増えていくと考えられる。
- ・実際に学校でも多くの人カラコンを使用しており、おしゃれの一部として身近な存在になっていることが分かる。

7 考察と課題

- ・医療用として使われているカラコンは将来的になくなる可能性があるが、カラコン自体はデザインや素材、機能面で進化を続けていくと考えられる。
- ・視力を矯正する目的のものは次第に使われなくなり、別の新しい視力矯正技術に置き換わっていくと思われる。
- ・現在主流となっている度数入りのワンデイやワンマンスのカラコンは、将来にはなくなり、より便利で新しい形のカラコンが登場する可能性がある。
- ・そのため、カラコンは視力矯正の道具ではなく、主におしゃれを楽しむためのアイテムとして、これからも使われ続けていくと考えられる。



1 研究テーマ

対馬を世界遺産に登録しツシマヤマネコの知名度を上げるためには

2 系列名・学年・氏名

3年 3202

3 指導担当者

山崎 康芝朗・山本 翔一郎

4 研究目的

ツシマヤマネコがベンガルヤマネコの亜種であり、近い種でイリオモテヤマネコなどがあることがあまり知られていない。したがって、研究目的はどうやったら知名度を上げられるかに答えを出すこと。

5 実施内容

最初は世界遺産について調べて条件等を整理した。条件を調べた際にタイトルにあるツシマヤマネコを世界遺産には登録できないことと土地などが世界遺産受賞の対象であることが分かった。また、他にも顕著な普遍的価値が必要になることが分かった。

このことから世界遺産に登録する対象を対馬に変えることで方向性を定めようと決めなおした。情報収集は基本的にインターネットを使用して、環境庁の作成するページのように多くの情報と正確な情報が集まるサイトで集めた。

対馬を世界遺産に登録するという方向性に決めた後は、対馬で顕著な普遍的価値を示せるかどうかの肝である対馬に生息する動植物や歴史的な建造物を調べて使えそうなものを探した。

結果としてツシマヤマネコをはじめとする、対州馬やツシマノダケなどの対馬固有種、チョウセンキハギ、ハクウンキスゲなどの大陸系の植物種などが自然遺産として使えそうなものである。

また、世界遺産にできる可能性を探る中で、より対馬の認知度を上げる方法を探ったところ、シール作りを思いつき、これからはシールを作って広報していき、認知度の検証につなげていきたいと考えている。

6 まとめ（結果）

本研究では、ツシマヤマネコの知名度向上を目的として、世界遺産登録の条件や対象について調査を行った。その結果、ツシマヤマネコ単体を世界遺産として登録することはできず、土地や自然環境そのものが登録対象となること、また「顕著な普遍的価値」が必要であることが分かった。

この調査結果を踏まえ、世界遺産登録の対象をツシマヤマネコから対馬全体へと変更し、対馬が世界遺産として評価され得る要素について調べた。その中で、ツシマヤマネコをはじめとする対馬固有の動物や、ツシマノダケなどの固有植物、大陸系の植物種が存在することが確認でき、自然遺産として活用できる可能性があることが明らかになった。

対馬の自然環境とツシマヤマネコの関係性をわかりやすく伝える方法として、キーホルダー作成を考えた。

7 考察と課題

本研究を通して、ツシマヤマネコの知名度を上げるためには、単に希少な動物であることを伝えるだけでは不十分であることが分かった。世界遺産登録の条件を調べる中で、ツシマヤマネコが生息する対馬の自然環境全体を一体として評価する視点が重要であると考えられるようになった。対馬には、ツシマヤマネコのほかにも多くの固有種や大陸系植物が存在しており、これらをまとめて発信することで、対馬の自然の価値をより分かりやすく伝えることができると考えられる。対馬が自然遺産として注目されれば、その象徴的な存在であるツシマヤマネコへの関心も高まり、結果として知名度向上につながると考えられる。

今後は、対馬の自然環境とツシマヤマネコの関係性を分かりやすく伝える方法を考えることが、知名度向上において重要であるといえる。

発表Ⅲ

- 韓国文化系列
- 環境系列
- 情報ビジネス系列
- 生活福祉系列
- 美術・デザイン系列

1 報告内容

令和7年度 釜山外国語大学校訪問について

2 報告者

韓国文化系列 3年 3212・3214

3 指導担当者

西山奈美・松井広直

4 研修参加者

生徒 2年生10名 3年生4名 計14名

2年生：2108 2114 2125 2201 2204

2207 2210 2217 2218 2220

3年生：3207 3208 3212 3214

引率職員：白石教頭・柴田憲人

5 研修の目的

- ・ 普段学習している韓国語を実践し、会話力を向上させること
- ・ 韓国の文化や歴史を学習すること

6 日程

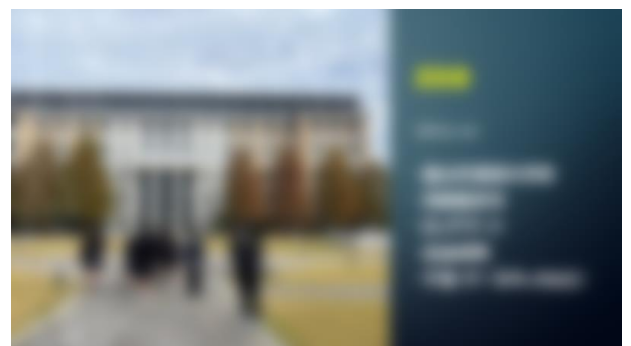
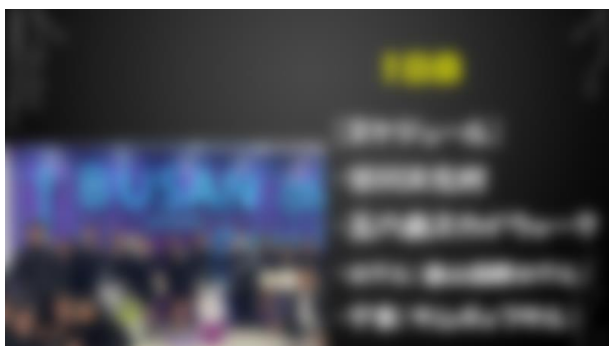
令和7年 11月12日(水)・13日(木)・14日(金) 2泊3日

7 気づいたこと・学んだこと

- ・ コミュニケーションをとるときは、ボディランゲージや翻訳アプリなどを駆使し、臨機応変に対応することが大事。
- ・ 韓国の食事はおかずの種類や量が多いので、工夫して食べる必要がある。
- ・ 韓国で買い物をするときは、韓国(ウォン)の金額に、「割る10」をしたら、日本円の金額になる。
- ・ 韓国はすべてのトイレで、トイレトペーパーを流せないと思っていたが、ホテルのトイレは流せる。

8 これから韓国語を学ぶ人・学んでいる人へのメッセージ

- ・ 今回、2泊3日の研修に参加して、韓国の文化・歴史・自然環境を直接、「見て・感じて」学ぶことができました。
- ・ 実際に現地の人と会話をするので、韓国語の会話が上達したと思います。
- ・ 来年度も、この研修が実施される場合は、ぜひ参加してほしいです。きっと、皆さんにとっても、素晴らしい体験になると思います。



1 調べ学習のテーマ

竹島について ～竹島の領有権をめぐる対立～

2 系列名・学年・氏名

韓国文化系列 3年 3209

3 指導担当者

西山奈美・松井広直

4 調べ学習の目的

将来、韓国語のスキルを生かして観光産業に関わりたいと考えている。そのため、日韓関係に対する理解を深めたいと考えた。そこで、両国の間で意見が対立している竹島問題について調べ、その背景を学ぶことを目的とした。

5 実施内容

- ・竹島とは何か
- ・竹島についての日本側の主張
- ・日本はいつから竹島を認知していたか
- ・サンフランシスコ平和条約と竹島問題
- ・李承晩ラインとは何か

6 まとめ（結果）

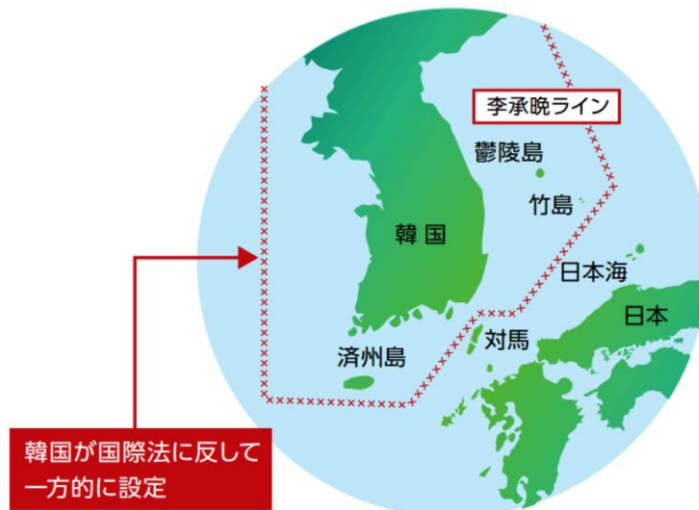
- ・竹島の地理的位置や、竹島の韓国での呼称、英語での呼称が分かった。
- ・竹島を日本の領土とする、日本側の主張について外務省のHPで調べた。
- ・日本は古くから竹島を認知しており、日本が竹島を日本の領土として主張している根拠が分かった。
- ・李承晩ライン設定とサンフランシスコ平和条約締結が竹島問題と深く関わっていることが分かった。
- ・李承晩ライン設定以前から韓国による竹島の実効支配はあり、李承晩ラインは韓国の竹島実効支配を正当化・強化するものであったことが分かった。

7 考察と課題

- ・竹島に関する韓国側の主張について、今後調べてみたい。
- ・竹島問題以外の日韓の抱えている問題についても調べてみたい。
- ・私は韓国や韓国の文化が好きで、将来は仕事の面でも多くの韓国の方々と深く関わっていきたいと考えている。だからこそ、日韓の問題についてもきちんと勉強していくことが大切である。



▲条約に調印する吉田茂首相(写真提供：読売新聞社)



▲李承晩ライン

1 研究テーマ 『放置竹林の現状とその解決策の提案』

2 系列名・学年・氏名 環境系列3年

3108 3201 3210
3216 3219

3 指導担当者 坂田 有規 美間坂 哲治 池田 知春

4 研究目的

本研究の目的は、郷土の自然環境を学ぶ中で気づいた環境問題に対して、その現状を分析するとともに解決策を考え、地域に提案することである。

5 実施内容

①環境系列の学び

環境系列では、3年間を通して学校内外の様々な場所に行き、地元の自然環境について学んだ。本校の教員のみでなく、実際に地元で生活をしている方からも話を聞いたり、実際に行っている活動を一緒に体験させていただいたりしながら、自然環境とそこに住む人々との関係をより深く学んだ。



左上：校内の樹木調査
左下：肥前のシーカヤック体験
右上：すり鉢山での生物調査
右下：呼子での海洋生物調査



左上：玉ねぎ農家さんとの収穫体験
左下：米農家さんとの稲作体験
右上：浜野浦での化石発掘調査
右下：竹炭製作の見学

地元の自然環境について知っていく中で、地元は様々な環境問題を抱えていることに気づいた。私達は授業の中で山に入りフィールドワークをすることが比較的多かったため、実際に目の当たりにして印象深かった「放置竹林」に注目してその解決策を考えることにした。

②放置竹林の原因予測と現状

解決策を考える前に、改めて地元の放置竹林問題の原因を予測するために竹林と人の生活との関わりについて調査した。放置竹林は文字通り放置されている竹林のことで、学校周辺でも写真1のような竹林を様々な場所で見かけた。竹は樹木と違い、地下茎で成長し、時には1日で150センチ程度成長することもある。そのため、里山において持続的な資源として利用されており、日用品や食材としての需要が非常に高かった。しかし戦後、竹を利用していた製品の材料がプラスチックに転換したことで竹林の利用機会が減少し、管理されなくなった竹林の地下茎が知らないうちに広がり、田畑や民家を侵食するようになった。これが放置竹林という環境問題の全国的な背景である。

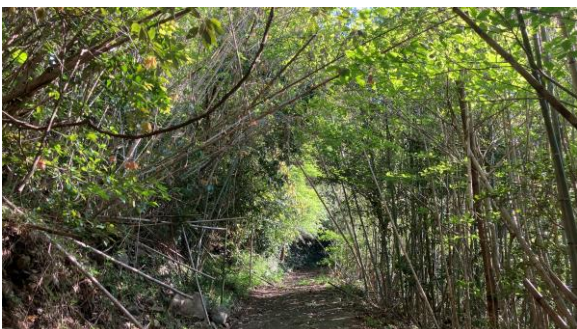


写真1：放置されたことで道路を塞ぎかけている竹林
(すり鉢山にて撮影)

しかし、全国的な原因だけでなく、地元ならではの原因もあるのではないかと考え、玄海町の社会的環境の追加調査を行った。玄海町の人口を調査してみると、表1のように全体人口が年々減少してきており、今後も減少していくことが予想されていた。また、人口減少の中で高齢者の割合が増加し、生産人口と言われる10代から50代までの働き盛りの世代が減少していることも分かった。以上2つの調査から、玄海町の放置竹林問題の原因は全国的な竹の利用機会減少に加え、前述した社会環境の変化によって土地の後継者や竹林管理者などの人的資源が不足していることものではないかと予想した。また、玄海町役場農林水産課の海原様から提供していただいた資料により玄海町の竹林面積は約72ha（東京ドーム約16個分）に及ぶことも分かり、地元には予想以上に広大な竹林が存在していることが分かった。（表2）

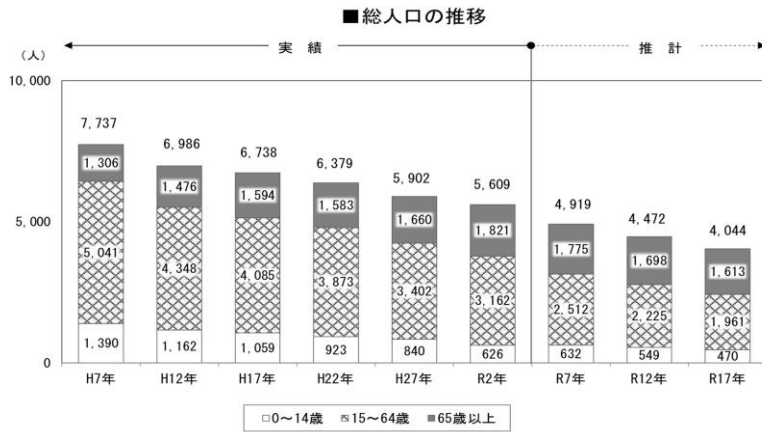


表1：玄海町の総人口の推移（玄海町ホームページより）

大字	合計(ha)
仮屋	0.44
轟木	3.71
今村	4.54
座川内	5.28
諸浦	0.4
小加倉	5.73
新田	0.28
石田	12.26
大藪	0.95
大串新田	1.3
値賀川内	3.63
長倉	3.41
田代	1.16
湯野尾	3.99
藤平	2.26
浜野浦	1.25
普恩寺	0.71
平尾	0.92
牟形	3.83
有浦下	6.79
有浦上	9.47
総計	72.31

表2：玄海町の竹林面積（森林整備変更計画書 R6.4.1より）

このように予想した原因から放置竹林の解決策を考えた。それは、私達の手で放置竹林の竹を伐採し、利用価値のあるものに加工するとともに、それを利用した商品を玄海町の店舗と共同開発し提供していくというものだ。竹を利用するだけでなく玄海町自体を盛り上げ人口を増加させることが放置竹林を解決するためには必要と考えたからである。今回はその最初のステップとして実際に竹炭を製作し、解決策の考察を行った。

③竹炭の製作

竹炭の製作方法に関しては、実際に製作・販売もされている「いちえん」の吉田様の工房にお邪魔してご助言をいただいた。その後、コンソーシアムマネージャーの岩沢様に竹林を保有されている方を紹介していただき、竹を伐採した。吉田様からの助言のもと、4分割にして約1ヶ月間乾燥させた竹を空気が入らないようにブリキ缶に敷き詰め、白い煙が出なくなるまで3時間焼いた。（写真2、3）

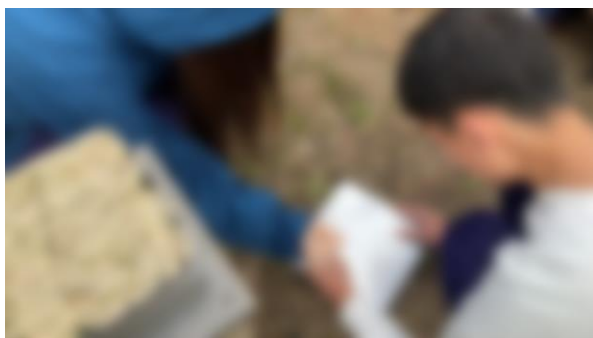


写真2：竹を敷き詰め通気孔を開けている様子



写真3：焼いている様子（白い煙は竹の水分）

6 結果

竹炭には柔らかい竹炭と硬い竹炭があり、一般的には高温でつくと硬い竹炭ができるが、私達が製作した竹炭は柔らかく、力を加えると割れるものであった。(写真4)炭になりきれしていないものも一部あったが、柔らかい竹炭は主に消臭剤や除湿剤、土壌改良材としての利用することができる。



写真4：今回製作できた竹炭



写真5：完成後は流水ですすぎ、乾燥させ保管した

7 考察と課題

今回、初めての試みとして竹炭の製作を実際に行ったが、失敗せず完成させることができたことはとても嬉しかった。しかしながら、竹を伐採しそれを学校まで運搬し、それを分割し節をとり、乾燥させて3時間焼くという一連の流れに必要な労力はかなりのもので、高校生としての立場から考えてもとても負担が大きかったと感じた。また今回は小さめのブリキ缶を用いて製作を行ったため、「いちえん」様のような窯も作成せず規模が小さかったように思う。そのため厳密な温度管理ができず、高品質とは言えないムラのある竹炭となった。そのため、次年度以降は玄海町の企業や役場に今回の取り組みを紹介し、協力していただけたところと繋がることにより、作業を効率化して高品質な竹炭の製作を行うことが必要だと考えた。

次に今回の竹炭製作活動が放置竹林問題の解決策になるかということについては、この活動のみでは難しいのではないかと考える。前述の通り、農林水産課からのデータによると、玄海町には72haと広大な竹林があることが分かっている。また、人口が減るにつれてとくに若い人の割合が年々減少してきている状況にも鑑みると、広大な竹林を持続可能な状態（私達が働き続けるのではなく、地元の人々の働きでこの問題が解決すること）にするには、竹炭以外の竹の利用法も探し、竹炭製作も引き続き発展させていくべきだと考える。そして、その活動を発信していくことで玄海町に人を呼びこむことが大切なのではないかと考える。

やはり、放置竹林を根本から解決させていくには、玄海町への移住者を増やすことが必要だと考える。次年度以降、企業や県と連携して竹の利用法を紹介しつつ、店舗と連携し、商品開発も進めていくことで玄海町を盛り上げると、放置竹林の問題が解決していくと考える。

1 研究テーマ 『前川菓子屋さんとのコラボ商品の開発』

2 系列名・学年・氏名 情報ビジネス系列3年

3105 3107 3110 3115
3116 3117 3202 3206
3211 3215 3217

3 指導担当者 吉原・江川・佐々木・山本・浦川

4 研究目的

本研究の目的は、地域の特産品や課題に着目した商品を開発することで、地域経済の活性化に貢献するとともに、商業高校生として地域と連携した実践的な学習を行うことである。

5 実施内容

玄海町にある前川菓子屋さん（以後、前川さん）は丸ぼうろなどの和菓子を製造・販売されている。今までに開発した商品と違い、玄海町にある商店と協力をして、商品開発、販売、会計報告を行うことを目標として活動を行った。

①前川菓子屋さんの紹介

前川菓子屋さんは昔ながらの和菓子を100%手作りで提供している和菓子屋さんである。販売されている商品は丸ぼうろのほか、さざえを模ったもなかやまんじゅうなどである。

②商品開発へ向けた活動

今回、前川さんに製造を依頼するにあたり、時間も限られているのでお店で製造されている丸ぼうろをもとに、形を変えた商品で開発することを考えた。そのためにおこなったのが、丸ぼうろの形を決める→商品名を考える→パッケージデザイン作成という段取りである。

形を決める話し合いの中で、学校の校章などのアイデアもでたが、情報ビジネス系列をアピールできるものでシンプルなデザインを考えた。そこで、日頃からパソコンで実技を学ぶことが多いこと、来年度からeスポーツ学科が新設されることを踏まえ、「Enterキー」を作ることに決めた。

次に商品名だが、限界ぼうろ、笹ぼうろなど色々なアイデアが出た。その中で、Enterキーがキーボードの一部であることから、『キーボウロ』という洒落も入れた名前に決めた。

最後に、商品を入れるパッケージデザインを考えた。Canvaを使用し生徒の個性を生かした作品をそれぞれが作成した。生徒が考えたパッケージデザインを候補として、生徒と職員で投票を行った結果、下に示す中の一番右のデザインに決まった。



唐津青翔高等学校:情報ビジネス系列

③コラボ企画の提案

商品の形がEnterキーに決まったことで、前川さんに正式に製造の依頼に行った。その際、2年生で習ったビジネス・コミュニケーションの知識を生かし、電話応対などビジネスマナーを意識して生徒自ら交渉を行った。前川さんと直接話し合いの場を設けることで、商品に関する具体的なアドバイスをいただくことができ、社会人として必要なビジネスに関する経験をすることができた。結果として、前川さんから正式に製造の承諾をいただいた。

④型枠の作成と焼きごての発注

前川さんに商品を製造していただくためには、キーボードの型枠が必要となる。知り合いの業者やインターネットで全国の関連する業者にアポイントを取ったが、金額が高かったり納期が遅くなったりするなど、簡単に作成できないことが分かった。そこで、本校に勤めるALTのニック先生が3Dプリンタでの製造を得意としていたので、試しに頼んでみると二つ返事で承していただき、1週間程度で型枠を作成してくれた。

また、キーボードにEnterと記号を焼き印するための焼きごては、インターネットで探した北海道の業者に依頼し作成していただいた。

⑤販売実習へ向けた準備

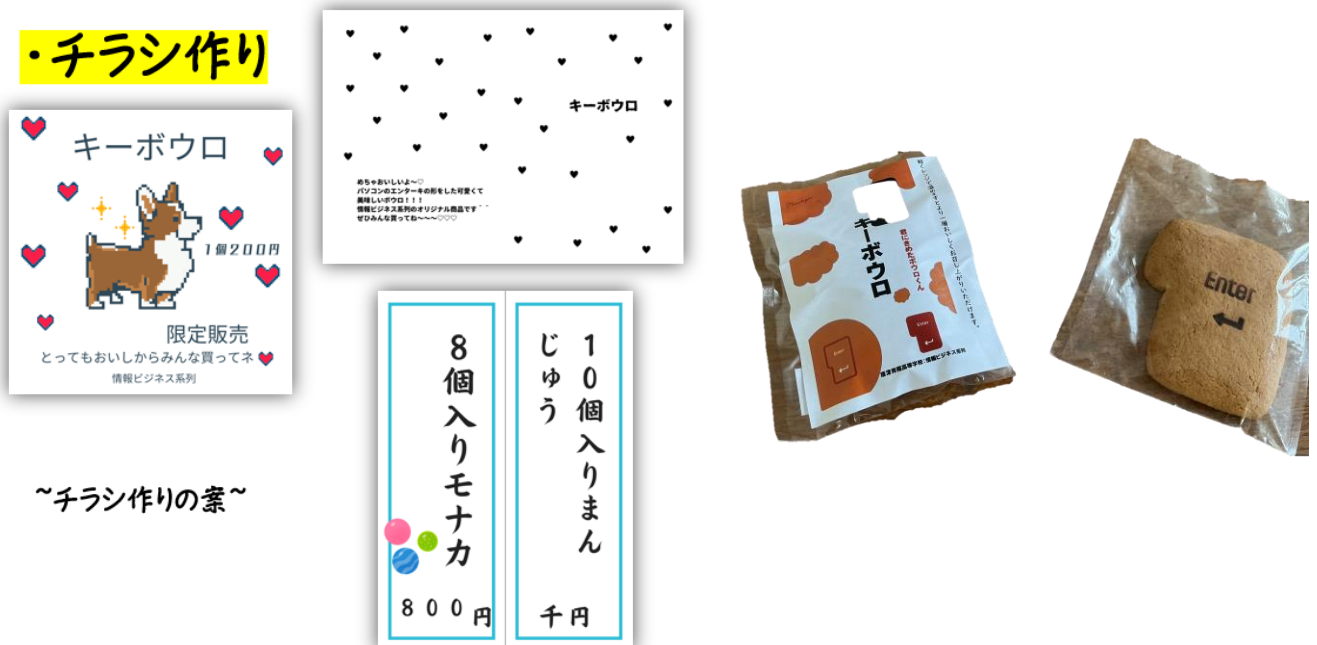
10月に行われる青風祭と玄海町で行われるマルシェでキーボードを販売することを決定した。販売実習へ向けた準備として、チラシの作成を行った。チラシを作成する際、(1)ターゲットを決める。(2)商品の特徴を簡単に伝える。(3)目を引くキャッチコピー。(4)ビジュアルを重視。(5)価格や特典を強調。(6)連絡先や購入方法を記載など、どのようにアピールすれば販売促進につながるのか、お客様目線を大事に作成した。

そして、前川さんから届いた商品にパッケージシールを貼り、実際の商品が出来上がった。商品開発の授業を始めた時は、ここまで出来ることはあまりイメージできなかったが、実際の商品を手にとると自分たちで一から作り上げてきた成果に今までの授業では感じたことがない達成感があった。

⑥販売実習

販売実習を10月に行う青風祭(文化の部)と特別養護老人ホームで行われる玄海園マルシェの2回に分けて行った。その際、今回の商品開発でお世話になった前川さんの商品しっとりもなかも一緒に販売した。青風祭に関しては事前に予約を受け付けて、80個販売することを目標にした。1個あたりの単価を200円に設定したが、生徒や職員の方へ積極的に前売りが行え、予定した80個を無事に完売することができた。校内では仲間内ということもあり順調に販売できた分、実際に商品の良さなどを十分に説明しての販売はできていなかった。

それに対して校外の玄海園マルシェでは、お客様は商品について説明を聞いてから購入されるので、最初は積極的に声掛けや十分な説明ができず販売も伸び悩んだ。しかし、時間とともに状況に慣れていくと多くの方に声掛けができるようになり、準備していた80個を完売できた。



～チラシ作りの案～

6 まとめ（会計報告）

販売したキーボードの収支報告を紹介した後でCVP分析を用いて探究する。キーボードの収支報告の合計を見ると、収入に対して支出が多いので赤字になっている。

ここでなぜ、キーボードは赤字になったのかを調べるためにキーボードのCVP分析を行う。まずはキーボードの損益を計算すると、7,570円の赤字である。ここからはCVP分析を用いてどれくらい売ったら損をしなかったのかを確認していく。最終的に計算を行うと287個が損益分岐点の売上個数になる。この287個一回売り上げた160個で127個なる。あと127個売れば黒字、ということになる。

※ CVP分析とは、費用（Cost）、販売量（Volume）、利益（Profit）を把握することで、販売量の変化に伴う利益と費用の変化を分析する手法を指す。

7 考察と課題

今回、販売の部分を中心に分析を行った結果、マイナスを計上している。しかし、事前にCVP分析の知識を持って販売を考えることができれば、違った結果になったかもしれない。実際に商品のアイデアを考え、商品化し、販売、利益計算までを行ったが、1年生から授業で学んだ「商業」の知識をいかすことができた。簿記の授業では取引の記帳方法を、原価計算では原価、利益計算の方法を、情報処理やソフトウェア活用では表計算での報告書の作成を、ビジネス・コミュニケーションでは販売時や取引先などとのやり取りの方法など、実践で生きる知識を身につけることができた。しかし、課題として与えられたことや指示があることには取り組むことができるが、まだ自分たちから積極的に話し合ったり考えたりして主体的に行動することはできなかつた。来年から就職や進学などでそれぞれ違うフィールドで活動することになるが、情報ビジネス系列で学んだ知識やマナーなどを意識して頑張りたい。そして、これまで私たちの活動に協力していただいた前川菓子屋さん、地域商社さん、販売実習の機会を提供していただいた企業の方などに感謝の気持ちを忘れず、卒業後の進路先で活躍していきたい。

収入の部	
学校祭 (10/16) @200×80個	16,000
玄海園 マルシェ (10/25) @200×80個	16,000
合計	32,000
支出の部	
学校祭 (10/16) @140×80個	11,200
玄海園マルシェ (10/25) @140×80個	11,200
焼きごて	16,170
型枠作成のお礼	1,000
合計	39,570

☆現実

売上	32,000
変動費	22,400
貢献利益	9,600
固定費	17,170
営業利益	△7,570



★理想

売上	57,400
変動費	40,180
貢献利益	17,220
固定費	17,170
営業利益	50

$$287 - 160 = 127\text{個}$$

(損益分岐点の個数) (今回売り上げた個数) (損益分岐点までの個数)

1 研究テーマ

「私たちの介護観」 ～系列活動を通して見えたこと～

2 系列名・学年・氏名

生活福祉系列3年 3101 3102 3103 3106
3205 3220

3 指導担当者

綾部 公基



4 研究目的

社会の中には介護に対する負のイメージがある。1. 介護の現場は過酷で、2. 思い通りにならずストレスがたまり、3. 自己犠牲の精神が必要だと言われる。このような負のイメージを介護に感じている人は少なからずいる。その状況の中、介護職に就く生徒がいる。この負のイメージを感じながら、介護や援助について学び、系列活動を通して感じた介護の壁、そして、その壁に向き合いながら導き出された「介護観」とは何か。生徒一人ひとりが自分の気持ちに向き合い考察した。

5 実施内容

1) 高齢者の理解とレクリエーション支援

①高齢者の方の心身・身体を理解

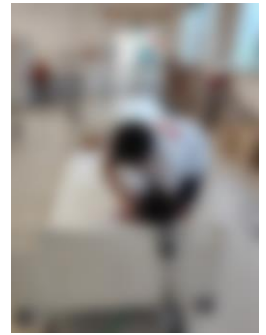
授業において高齢者の心身・身体について学習し、生活援助の方法を学ぶ。

②高齢者の生活背景を理解

昭和時代に流行った音楽や遊び、そして、その時代の生活背景を調べる。

③レクリエーション方法の練習

高齢者の方の世代に合わせた歌体操を考え、自分たちで何度も練習を重ねる。



2) 「ふれあい・いきいきサロン」活動での実践

①実施月・・・7月、11月、12月、1月

玄海町長倉地区やそぞろかわち地区の皆さんと計4回

②内容

- ・体操
- ・風船バレーやトランプ等のレクリエーション
- ・肩もみ、コミュニケーション



6 まとめ（結果）

参加された方は真剣に勝負され、お互い笑顔で盛り上がった。レクリエーション計画において生徒が考えた「楽しいこと」や「面白いこと」が参加者の方々と共有でき、一体感が生まれ、地域の方々と喜びを分かち合った。

7 考察と課題

生徒が「楽しい」と考え用意したゲームを利用者さんに楽しんでいただけるかどうか。結果的には生徒の成功体験となり、介護に対する認識に変化が生まれた。

①介護とは「お世話すること」ではなく、お互いの気持ちを交流させるサポートであること。

②自分自身の気持ちは黙っては何も分かってもらえないこと。そして、自分から伝えることで、はじめて気持ちの交流ができるということ。

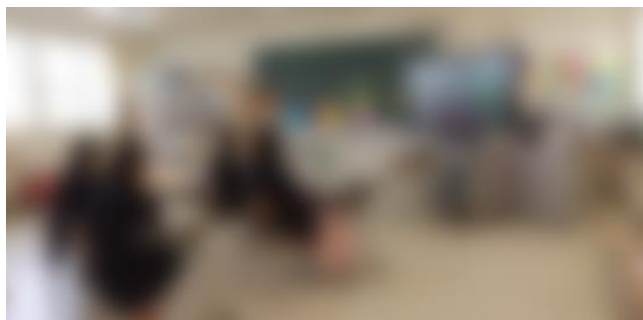
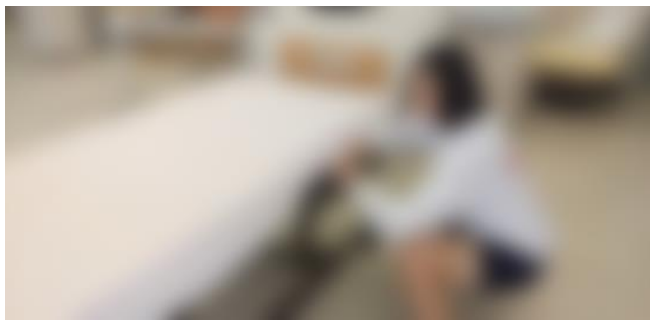
③よろこばせたい気持ちが、自分自身に関わる方々を元気にするということ。

今後の課題としては、そもそも援助者とはどういう存在であるべきなのか、生徒自身の自己理解を図る必要があり、その自己覚知に基づく、他者理解をいかに進めていくかが課題と言える。

8 活動の記録

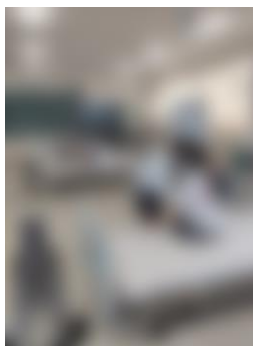
(Ⅰ) 1年次

9月に社会福祉系列を選択した6名が、10月から「社会福祉基礎」を学んだ。座学以外には「ベッドメイキング」等の実技練習や、1月「認知症サポーター養成講座」、3月「手話講座」を受講。



(Ⅱ) 2年次


「生活援助従事者研修」を受講。生活支援に必要な基本姿勢や考え方を学び、基本技術の習得を目指した。介護技術コンテスト、介護施設見学・実習のほか、全国障害者スポーツ大会補助員、西九州大学短期大学部学生との交流会等を行った。




「実技練習」

「介護実習」



「全障スポ競技補助員」 

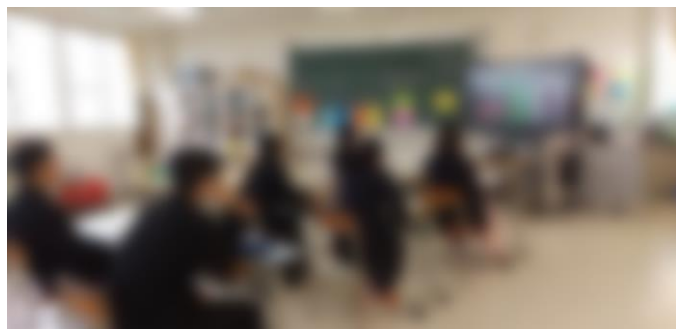
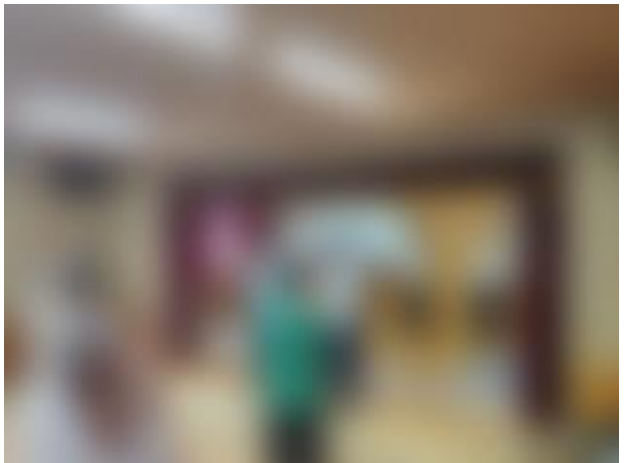
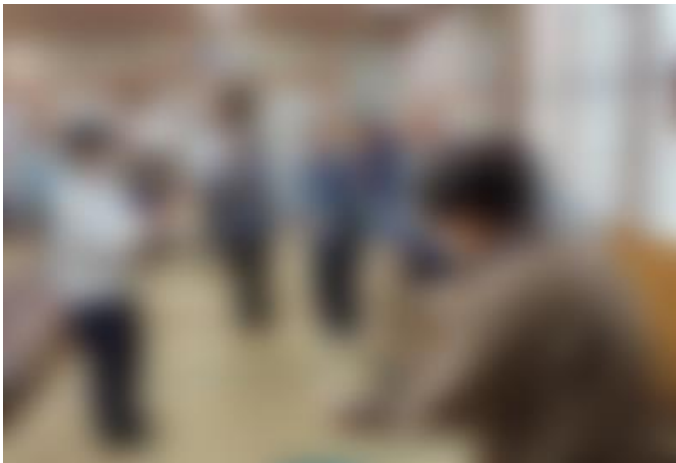
 「介護技術コンテスト
基礎技能部門（第3位）」



(Ⅲ) 3年次

「介護技術の応用」「レクリエーション支援」「地域サロン」等に取り組む。「西九州短期大学地域生活支援学科介護福祉コース」の学生との交流を行う。

玄海町
社会福祉協議会
主催
長倉地区
ふれあい・いきいき
サロン



地域の皆様のご支援とご配慮により、年を追うごとにサロン活動やボランティア活動等の幅が広がりました。感謝の気持ちを忘れず、これからも地域福祉の一助となれるよう頑張りたいと思います。

令和7年度 美術・デザイン系列 活動実績報告

「イメージを形に」

～多彩な発想と表現力を身につけるために～

1、学科名・生徒氏名 美術・デザイン系列 3年

2、指導担当者 岡田 勝己

3、研究目的

絵画や彫刻作品などを制作する上で自らが抱く「イメージ」、デザインや工芸品など依頼者や社会が求めている他者が抱く「イメージ」、それらの「イメージ」を形にしていくために、素描、絵画、彫刻、デザインなどの作品制作をとおり、ものの見方やとらえ方、技術や技法を学び、「イメージ」にあわせた表現力を身につけていく。

4、実施内容

【1年】素描

基本となるものの見方、とらえ方をデッサンをとおして学ぶ



写真をもとに、鉛筆の濃淡を使って表現



元になる写真を、一旦白黒に変換し、陰影を意識しながら、彩色

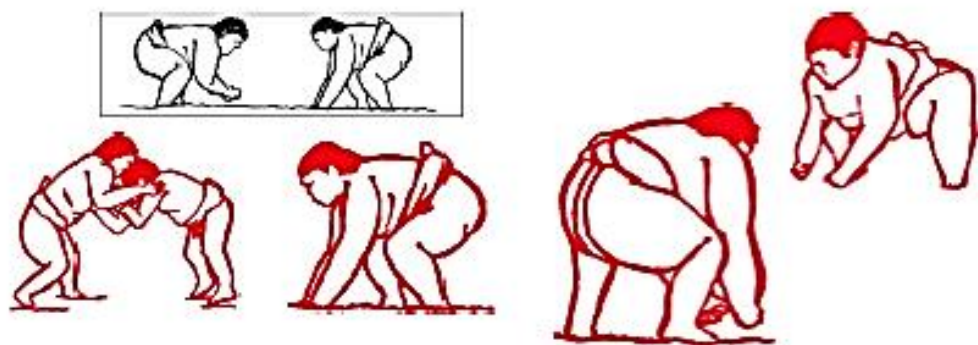
【2年】絵画、彫刻、ビジュアルデザイン

油彩画、石彫、ポスター、CGなどの小作品の制作をおし、様々な表現技法を学ぶ



イメージ展開の実践例【国民スポーツ大会〔相撲競技〕ポスター原画】

- ① 手書きで描いたキャラクターをパソコンに取り込み、大きさや色を変更



- ② 棚田の写真を背景として合成



【3年】絵画、制作研究、映像表現

これまで学んできた表現技法を活用し、自分の持つイメージや社会が求めているイメージを作品（大作）にしていく





① 小さい紙にペンで下描きし、PCに取り込む



② デザインソフトで配色



③ レイアウトソフトで文字等の入力、編集



④ 原寸大になるように出力しトレース



⑤ 彩色、完成

5、考察と課題

リノベーション工事に伴い、新しい教室にパソコンなどの新しい機材が入ってきます。しかしながら、次年度の学科改変に伴い、新入生から、美術・デザイン系列がなくなることで、これまで行っていた美術・デザイン系列の科目がなくなってしまいます。自由選択の方で4科目増える予定ですが、それぞれが別科目として存在しているため、これまで行ってきたような、基礎から順序立てて学んで行くことはできません。

従って、本気で美術を学びたい生徒、パソコンを使用したイラスト制作や3DCGを学びたい生徒は、美術系の選択科目をすべて選び、放課後の時間も活用しながら、他の生徒たちとは別メニューで学習活動を行っていく必要があります。そうしなければ、今回、新しく入る設備も十分に活用されずに終わってしまうでしょう。



令和7年度 活動実践報告書

佐賀県立唐津青翔高等学校

〒847-1422

佐賀県東松浦郡玄海町大字新田1809番地11